

ジャグパル

JugPal



2006年7月9日 第34号



インタビュー

【まる さん】

今回はパフォーマーのまるさんにインタビューをお願いしました。まるさんはジャグリング界ではそれほど露出度は高くはないのですが、知る人ぞ知る超一級の技術を持ったパフォーマーです。が、ご自身は“自分はジャグラーではない”と言い切ります。えっ、それだけの技術を持っていながら、何故？演技とジャグリングの技術の関わりについての話題が中心となった今回のインタビュー……さぁ、はじめは始まり。

(注) まろさんのWebサイト <<http://maro.tv/>> には、ステージ映像(動画)が紹介されていますので是非ご覧下さい。



まる さん

はじめに

柔道部で“ボールは投げずに人を投げるのに夢中だった”学生時代には、演劇部にも在籍し、中学一年生の時には既に「自分は将来舞台で役者をやっているんだろうな」と思い、自分が今歩んでいる道が舞台俳優へ続いていると何の疑いも迷いも心配もなく信じていたそうです。それは夢とか目標とかそういった類のものではなく、小学校を卒業したら中学生になるのと同じようにごくごく自然な事として受け止めていたとのこと。

それでは、中学生の時に描いた大人になった自分の姿と、今の自分の姿(パフォーマー)とを比べると、これは予想外の事だったのでしょうか？そうではないとまるさんは仰います。

なぜ？その理由自体がまるさんのパフォーマーとしての生き様につながるようにも思えますが、その「理由」を理解するためにもまずはまるさんへのインタビューをお楽しみ下さい。インタビューの最後にその「理由」が分かります。

ジャグリングとの出会いは？

まるさんが幾つかの劇団の入退団を経た後に、表現手段としてのパントマイムに注目して、現在の汎マイム工房 <<http://www.xes.co.jp/pac/>> に入ったのが5年前で、その時に初めてクラウンの一つのスキルとしてジャグリングに出会い、イベント出演用にと多種多様な道具(ボール、リング、クラブ、ディアボロ、ハット等)を練習していました。



『僕が当時求めていたジャグリングというのは、高度な技を見せて驚かせるジャグリングでもなく、クラウニングとしてのジャグリングでもなく、あくまで舞台作品、演技としてのジャグリングだったのです。それは例えばジャグリングの技術だけでIJAのチャンピオンを目指すようなことは求めていなかったということです。』

では高度な技術は必要ない？

『いいえ。僕なりに設定した最低限必要な技術レベルというのは、一般的にみればかなり高度な技術だと思います。つまり海外のどんなプロジャグラーが見ても納得できるトップクラスのレベル、それが目指していた最低限のレベルです。ただそのトップクラスのジャグラーの中で一番になるという考えはありませんでした。でも最初から求めていた最低限の目標レベルが高かった為に、結局技術を追求していく必要があったということです。』

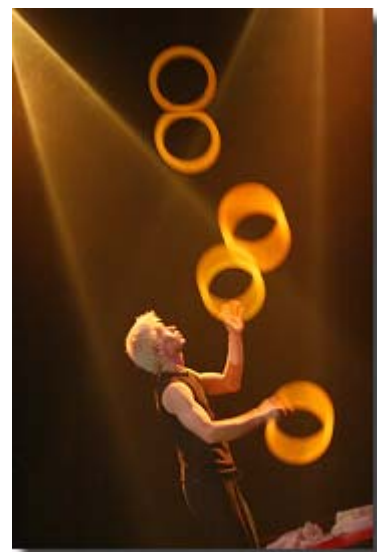
なぜ技術を“追求”するのでしょうか？

『人前でショーをやる以上、ジャグリングを披露するならば、プロである以上ジャグラーでなくても技術から逃げては駄目なんです。ジャグラーでなくても技術は必要なんです。つまり技術が身に付いていなければ演技ができないし、逆に言うと演技をする時にはジャグリングの技術がストレスになってはいけません。言い換えれば、安定した技術がなければ身体は動かないし、動いたとしても演技にならない訳で、作品を作る上では技術があるのは最低条件で、ましてやジャグリングを使ってオリジナルな事をやるには技術があるのは必須なのです。』

どうやって練習を？

『昔からほとんどビデオや本で独習でしたね。僕は日本のジャグリング界を全然知らずに、周りの状況や情報にも疎かったのでだいたい一人で練習をしていました。その証拠にジャグリングを介してできた友達なんて皆無ですよ。(笑) ジャグリングのみならず練習(学ぶ)っていうのは何でもそうですが、必要であれば楽しくて面白く幾らでもしてしまえますよね。』

ジャグリングを始めて6年目ですが、これからも身体はもっともっとう動いていると思うし、テクニックもどんどん覚えて将来自分がどうなっているかとても楽しみです。モチベーションを持って目的がはっきりしていれば年齢的な事に恐れはありません。60、70才になっても演じる側にいたいですよ。』



何を表現したいのでしょうか？

『人前で何かをやる以上、見た人の生活や人生に影響を与えられるような、例えばその人を元気づけ、あるいはその人の考え方や行動そのものが良い方向に向かっていくような、そんな演技をしたいですね。もっと広く言えば自分でできる範囲で世の中が良い方向へ向かっていけたら良いと思います。また自分自身で気をつけているのは、表現者として立っていると広い範囲の人にメッセージを伝える事ができるので、やるからには単に自分の考えを垂れ流すのではなく、伝えに足るだけの考え方や感動させられるような生き方をしていく必要があると思っています。』



作品作りはどうやって？

『“身体の動き”と“ジャグリングの動き”の両方から作っていきます。基本的には、身体の動きのイメージがあってそれを形にできないか考える訳ですが、その際道具は何でも良く、ジャグリングの動きを取り入れればこういう風に動けるとか、そういった試行錯誤を繰り返します。また作品を作る時には「起承転結」をいつも気にしています。それは一つの作品の中、あるいは一つの道具を使った数分間のルーティンの中でも意識しています。曲については、作品の世界観、作品のイメージあるいは動きのイメージが先にあってそれらに合う曲を選び、作品作りの過程において幾度となくフィードバックをかけて演技の調整を行います。作品作りにおいてきっかけが曲という事はないですね。』

渡独されるそうですが？

『今年の9月に文化庁の海外研修制度を利用してドイツへ2年間行ってきます。先達としてこの制度を利用して金井圭介さんがフランスのCNACで学んでいたこともあってこの制度を知り、ここ数年間はこの研修実現のために費やしてきたと言っても過言ではありません。ジャグリングの練習は当たり前ですが、身体作りとしてマイムだけではなく、バレエ、コンテンポラリーダンス、そして日本舞踊を習い、語学も勉強し、受け入れ先を探すために度々渡欧して多忙な日々を繰り返してきました。最初はフランスで演劇としてのジャグリングを学びたいと考え、フランス行きを目指していたのですが、何回か渡欧して現地のアーティストからの紹介などで紆余曲折を経て今回のトレーニングスペースと出会う事が出来ました。でもそのおかげでそれまでフランス語を勉強していたのに、今はさらに加えてドイツ語の勉強をする羽目になってしまいましたが。(笑)』

具体的には何処へ？

『Katakomben <<http://www.jonglierkatakomben.de/>> というところです。ここはサーカス学校ではなく、2001年に創設されたベルリンにあるジャグリングのための専門のトレーニングスペースです。プロのアーティストが練習したり、作品作りをしたり、レッスンもあり、ワークショップもありと、相当レベルの高い人が利用しています。エアリアル設備もあるのでアクロバットを含むサーカスアーティストも利用しています。設備も良いし教えてくれる人も練習している人もレベルは非常に高いです。』

何を学んでくるのですか？

『もちろん毎日毎日練習漬けとなって技術レベルを向上させると同時に専門性を伸ばしたいですね。今はいろいろな道具を使っているけれど将来的には専門としてボール(コンタクト、バウンス、トス)をやっ
ていこうかと思っています。
また作品の作り方や新しい考え方を学び、欧州のマーケット調査をしてビジネスを学びたいし、そうこれも重要ですが人脈(コネクション)を作りたいですね。



2年間で自分の専門(例えばボール)で5~7分位の一つの作品を作り、ドイツで仕事ができるようなレベル(通用できるようなレベル)になったら日本に戻っても良いかなあ！？例えば欧州のサーカスフェスティバルに出演できるレベルにまで仕上げたいのです。』

今の自分は、中学生の時に描いた大人になった自分とは違っていませんか？

『いいえ、そうは思いません。僕はずっと舞台での作品作りをやってきたし、自分にとって重要なことは“表現”なんです。だから中学校の時に描いた表現をするという思いは、その後の人生で絵を描いたり音楽をやったりマイムをやったりジャグリングをしたり・・・と形を変えながらも今も続いています。僕自身ジャグラーだと思いませんし、つまり自分が表現したいと思った時の手段としてジャグリングを選んでいるだけなのです。ただしジャグリングの技術習得のため結果的に練習量は膨大になりますが、中心はあくまで表現することです。
だからジャグラーではなく「演技者」というのが僕にとって適当な呼び名かもしれません。
僕にとって一番大切な事は、自分ができる範囲で自分や周囲の人、社会が良い方向に向かうために努めて生きることです。そのために自分が本当に正しいと信じていることができるなら、何をやっても良いと思います。』

おわりに



まるさんの帰国後の活動目標もお伺いしましたが、ここではあえて紹介しません。それは研修が終わる2年後がまるさんにとっての本当のスタートとなるので、今は目標自体どう変化するのか予想がつかないからです。

さあまるさんが帰国後我々に何をを見せてくれるのか楽しみに待ちましょう。

まるさん、気をつけて行ってきて下さいね！ \ (^ ^) /

[安部 保範]



公演レビュー

2006年6月、日本ではおそらく初めてであろう、プロが企画し多数のジャグラーが出演するジャグリング中心の商業公演が2つ開催されました。アマチュア公演では、京都のジャグリング・ドーナツ・ライブが何年も前から高い評価を確立していますし、マジック+ジャグリングの夢奇房(東京)の公演も3回を数えました。今回の2公演では、プロが企画・演出し、プロやトップ・レベルのジャグラーが演じると、どのようなステージが出来上がるのかが大きな関心の的でした。

どちらの公演も、観客の入りは良く、1日の公演としては成功だったようです。観客層をジャグラーではない一般に広げ、数日単位の連続公演に延ばしていくことができれば、ショー全体や個々の演目をより作り込んで完成度を上げていく努力に見合った収入も得られるはずであり、それがエンターテインメントとしてのジャグリング・ショーが定着するための、次の一里塚になるのでしょう。それぞれの企画が今後も続くこと、同種の試みが他にも出てくることを期待したいと思います。

【 Real Juggling 】

2006年6月10日(土) 15:00- / 18:30- 東京・こまばエミナーズ
一般前売り 3,500円 / 一般当日 4,000円



IJA チャンピオンシップ優勝者、入賞者を数多く含む若手ジャグラーをKAZUHOさんが集めての公演で、出演者の技術が高いことは間違いなく、各方面で話題を呼びました。

夜の部(18:35 19:50)を見ましたが、容量500人の会場がほぼ満員なことにまず驚きました。昼の部も7割程度の入りだったという話で、のべ800人程度がステージを見たことになります。

1つ1つの素材がよくても切っただけでは料理にはならないので、ショーとしての味付け(演出、構成)が楽しみでもあり懸念でもありましたが、オープニングや中間の出し物では出演者全員が絡む場面があり、ショーに奥行きを与えていました。また、青い帽子をかぶった「お調子者」役の進藤さんが要所ごとに登場して、演目をつなぐ糊の役割を果たすことにより、全体のまとまりが出ていました。ただし、舞台の背景にストーリーのようなものが意図されていたかどうかまでは見ただけではよく分からなかった気がします。

出演者全員がきちんと衣装を着て、舞台用メイクをしていたのは、基本が押さえられていて好ましく感じました。

照明や舞台背景については、まだ改善の余地があると思います。まず、白色系の背景に白い道具で照明も不十分なために道具や出演者の表情が埋もれてしまった演目が前半に2つほどありました。スモーク、ミラーボール、背景の電飾など、演目ごとにいろいろな効果が使われていたのは劇場の設備を活用していたと言える半面、「うれしくて、使える効果を全部使ってしまった」という印象を与えます。

タイムオーバーで曲が終わってしまった演目が3つあったのは非常に残念です。失敗した技のやり直しは、客席の心をつかむ面もあり、必ずしも否定されるべきではありませんが、音楽が途切れた状態で演技を続けると観客の心を現実に引き戻してしまうので、基本的には避けるべきであり、1ステージに3回は多すぎたと思います。

オープニング

スーツ姿の出演者が交錯しながら、1本だけのクラブをさまざまに扱っては受け渡していきます。これだけでもタイミングや立ち位置など、それなりの練習が必要ははずで、ショーを全員で作りに上げていく意気込みを感じさせ、期待を盛り上げます。

桔梗 崇(クラブ)

いきなり5クラブから入って度肝を抜き、クラブの本数を増減させながら、3クラブでのリバース・バッククロス、5クラブ・3アップ・ピルエット、5クラブでのサイトスワップなど高度な技を見せてくれました。

青木康明(リング)

「わ・た・し・たちはインベーターです」という奇妙奇天烈な音楽にのせ、1本のリングを耳や鼻など顔のあちこちに引っ掛けたり転がしたり、という独特なパフォーマンスで、初めて見た人はあっけにとられたことと思いますが、それだけで1曲を飽きさせずに見せるのは見事。進藤さんの「お調子者」と並んで青木さんの「インベーター」ぶりは、ショー全体の中で技術の高さから観客が受ける圧迫感を中和して、いい味を出していました。

進藤一宏(ボール)

青い帽子の「お調子者」によるボールの演技。舞台を前後左右に広く使いつつ、マルチプレックス、サイトスワップを多数織り交ぜた4,5ボールのルーチンは、ボールの軌道が噴水のように形を変えるので、非ジャグラーにも分かりやすく面白かったのではないかと思います。

矢部 亮(フープ・ジャグリング)

ディアボロで世界を制した矢部さんですが、フープ(大きな輪)という意外な道具を出してきました。これはプロの「売り」として、いい目の付け所だと思います。フープ・ジャグリングの名手であったボブ・ブラムソン Bob Bramson が引退した現在では、Lazer Vaudeville のカーター・ブラウン Carter Brown くらいしかフープ・ジャグラーはいません(ヨーヘン・シェル Jochen Schell のリング・マニピュレーションは別ジャンルとします)。フープは、転がして舞台全面を広く使うこともできるし、投げたり回したりバランスしたりすれば広くない舞台でも演じられるので、さまざまな状況に対応できる強みがあります。

技術的な習熟もかなりなもので、フープを5本まで使いこなしていました。特に3フープをカスケードのように交差させて肩越しに背中へ落とす技、逆に背中の後ろから肩越しに前に落とす技は、ボブ・ブラムソンが使っていたフープより小ぶりなものを使っているためか、ブラムソンの同じ技には見られなかった何とも不思議な独特の浮遊感があり美しかったです。温故知新で古典的な技を発掘するにせよ、独自の技や表現を開発するにせよ、フープには大きな可能性があるはずなので、今後が楽しみです。

KAZUHO(コンタクト・ジャグリング)

スモークとともに登場し、東南アジア風の音楽にあわせたクリスタル・ボールのルーチンで数を増やしつつ、4つまでを扱っていました。技の滑らかさも十分にあり、トス系のジャグリングを追い疲れた観客の目を休ませる意味で、中盤のちょうど良い位置にあったと思います。動きの小さなコンタクトを大会場で演じるのはどうしても不利ですが、落とす心配が少ない分、クリスタル・ボールにもっとスポットライトを当てて、きらめきを引き出すなど工夫の余地はあると思いました。

小川春香(バトン・トワリング、ダンス)

本格的なバトン・トワリングを見たことがあるジャグラーはあまり多くなかったようで、新鮮な驚きによる歓声が上がっていました。バトンを持って身体の周囲を回すコンタクト・マテリアル系の技、身体の上を転がすロール系の技だけで、高く投げるエアリアル系の技がないのはどうしてだろうと思っていたら、実は発光バトン(壊れやすい?)を使っており、暗転した舞台でのライト・ルーチンへと続いていきました。真っ暗な舞台だとロールやコンタクト・マテリアルでは、せっきくの身体の動きが見えないのが、ややもったいない気がしました。バトン好きの私としては、普通のバトンでじっくり技を見せて欲しかった気もします。とはいえ、次の演目へのつなぎとして、発光バトンと暗転は重要なのですが...

全員によるパフォーマンス

発光ボタンや発光リングを使った全員によるユーモラスなライト・ルーチン。見ていて楽しかったですし、それぞれ別々に活動していて合同練習の時間をあまりとれないメンバーで「チームとしてまとまりのある演技」をするためには、費用対効果の高い演目だと感心しました。

森田智博(ボール)

ボールとピルエットのエキスパートによるボール・ルーチンで、4,3,5,7 ボールを順番に演じました。トリプル・ピルエットも1呼吸できれいに回ってしまうのはさすがですが、フィニッシュの7ボールが決まらずに再挑戦となったのが残念でした。レオタードのようなびったりした衣装より、ゆったりしたもののほうが体格的に似合うだろうと私は思いました。

青木康明(リング)

二度目の登場で、今度は3リングですが、やはりジャグリングしながら耳に掛けたり転がしたりと、ユニークです。青い帽子の「お調子者」と絡みながら、野球の配球で言えば「チェンジアップ」の役目を果たしてくれました。

桔梗ブラザーズ(クラブ・パッシング)

篤、崇のIJA2005銀賞チームによるクラブ・パッシング。強めの照明を受け、高速に回って飛び交う銀色のクラブは華やかでした。5本でのテイクアウェイ、7本での背中合わせ、10本までのパッシングなどをやっていたし、1人がもう1人の肩の上に立って上下6本でパッシングをするのは面白い試みでした。JJF2003でVova & Olgaが教えていた技がルーチンの中で活用されているのは、関係者として少しうれしかったです。

矢部亮(ディアボロ)

矢部さん本人のボディーワークもきれいでしたが、アシスタント・ダンサーとして小川春香さんが踊りながらディアボロの追加を持って出てくるのがゴージャスできれいでした。雰囲気的に、ラスベガスのホテルのショーの1演目としてこの演技が入っていてもまったく違和感がなさそうな感じです。途中でトラブルしたときにも、まったくあわてることなく対処するところは貫禄すら感じます。

ディアボロが本業だけに技のレベルも申し分なく、2ディアボロが小さい巴状に回りあっている状態で上下左右に振ったり、回転軸を垂直にした状態で身体の周りを回したりスーサイド(両手離し)を決めたりと、いろいろ見せてくれた後、最後に3ディアボロのシャッフルとハイトスで締めくくりました。

【堀の外のジャグリング】

2006年6月24日(土) 15:30- / 19:00-

東京・門前仲町天井ホール 一般前売り2500円 / 一般当日3000円

「ハードパンチャーしんのすけ」こと矢熊進之助さんが呼びかけて集めたジャグラー7名が、「使用する道具は1種類のみ」「作品の時間は10分以上」という「しぼり」を与えられて作品を作る、という企画でした。「1つの道具で10分」というのはなかなか難しい条件ですが、それによってショー全体のテーマを強制するような条件ではないので、結果的には暗転で区切られた演目を並べた「屋台村」形式のショーになっていたと思います。中華も寿司もカレーも食べられる屋台村のように各パフォーマーの個性やアプローチが見られて面白かったですが、もしも懐石料理のような統一感のあるショーを作ることを目指すのであれば、また違った「しぼり」を考える必要がある気がします。



各パフォーマーの演目を見てみると、路上やイベントでの普段の活動ではできない舞台ならではの演技を作りこんできており、このような機会を得られたことはパフォーマー、観客の双方にとって有意義であったと強く感じました。

会場は80人ぐらいが定員の小ホールで天井も低く、トスジャグリングにはあまり向かない舞台でしたが、きちんとしたピアノが備え付けてあるというのがポイントだったようです。

昼の回を見ましたが、客席に子供の姿が多かったのが主催者の普段の活動を反映していて特徴的でした。飲み物とお菓子のサービスはうれしかったです。公演は2回とも満員御礼だったということで、今後につながっていく期待が持てます。

メトロノーム・ダンス(chie, デビルスティック)

紅一点かつ唯一のアマチュアによる、音楽とのシンクロにこだわったデビルスティックのルーチン。デビルスティックは他の道具に比べて音楽に合わせるのが難しい道具ですが、これだけ曲にぴったりに合ったルーチンを作ったのはたいしたもの。難度の高い技が入ったためにドロップが多めだったのは残念でした。登場人物のキャラクターと状況を設定して演技していましたが、技が決まったときなど地の笑顔が出て、見る方として混乱したところも少しだけありました。せっかくのチャームングな笑顔なので、芝居をするより地を出した方がよいかも知れないと思いました。

TOMスタイル(マジカルTOM, ディアボロ)

登場しただけで観客の目を惹き付ける豊かな表情は、さすがに実戦で磨かれたプロだと思いました。観客の予想を裏切って、普段通りにしゃべりまくりつつ、普段の営業では見せることができない「難しくマニアックだけど地味な技」、たとえば「逆立ち東京タワー」

などを次々に見せていきます。

音楽に合わせた2ディアボロのルーチンでも同様に、「地味な技」を解説付きで演じ、ショー全体の中では異色の大道芸スタイルを貫いていました。

Courtship Behavior(鶴岡アキラ, コンタクト・ジャグリング)

題名の「求愛行動」が示すとおり、透明なボールをまさに「掌中の珠」のように慈しみ撫で回すコンタクト・ジャグリングの演技でした。春の「フール祭2006」でもコンタクト・ジャグリングを演じていましたが、そのときよりもコンタクト・ジャグリングが滑らかになって技術的に良くなっていましたし、透明な赤のボールを加えたことによりストーリー性が加わっていました。また、会場が小さくて舞台への距離が近いのも、コンタクト・ジャグリングには有利でした。本業であるパントマイムでつちかった表情の表現力や体操的な身体の動きはさすがで、強い効果を与えます。ボールの数はどんどん増えていき、最終的には片手4個ずつで両手8個、さらに両手で9個まで増えたと思うのですが、ここはもう少し手前で止めておくべきだったと思います。やはり、コンタクト・ジャグリングの魅力は、ボールが常に滑らかに動き続けるところにあるので、きちんと動かせなくなる個数まで増やすべきではないと感じました。

かぶる！カブル！カブ～る(ひいろ, ハット・ジャグリング)

まず、登場方法が見事でした。ショー全体がぶつ切りになるのを防ぐ、よいアイデアです。独特の髪型、表情も、観客を惹き付ける強い力を発揮していました。演目は、1つから3つまでの帽子によるかぶり分けで、音楽に合ってテンポ良く楽しいものでした。ドロップがやや多かったのが残念でしたが、楽しいルーチンなので、ぜひもう一度完全版を見てみたいと思いました。

水中ジャグラー王選手権(じゅ〜むす今川、パントマイム)

「水中でジャグリングをしたらどうなるか？」というテーマで、今回のジャグリング・ショー向けに新たに作った演目なのだと思います。水中でのシガーボックスは、とてもリアリティがある一方で面白おかしく、楽しめました。開演前の客いじりも担当していました。

カライジュラル(トルコ民謡)(江草啓太、ピアノ独奏)

民謡と聞いて浮かぶイメージとは違い、ジャズ的な疾走感のある曲で、繰り返し現れる主旋律も心地よく、さわやかに聴けました。熟練したピアニストの指先の動きは、熟練したジャグラーの腕の動きと同様に、むらや無駄がなく、美しく見えることに気が付きました。

2月(目黒陽介、ディアボロ)

なぜタイトルが「2月」なのかは、残念ながら私には分かりませんでした。床の上に這い、床の上に垂直に立てたディアボロを振り動かし、立ち上がっても連続技には入らずに技1つを決めては止める、というディアボロの常道に反する前半の演技は、「技を見せるよりも表現を見せる」というメッセージを伝えていました。そして後半、床の上で垂直に立っていたディアボロは、垂直のまま空中を舞い始め、低い天井の下での3ディアボロ・ハイトスのフィニッシュへとつながります。床の上ではなく、高さのある舞台の上で見たいと思いました。

FRAGMENT(SOBUKI、クラブ・マニピュレーション、ジャグリング)

たった1本のクラブを振り回し、ひねり、落として捕る、それだけで単調さも退屈も感じさせずに1曲を演じることができるのは素晴らしいと思いました。ルーチンと振り付けがよく練られていた上に、黒い袖無しの衣装、引き締まった腕、そして純白のクラブが引き立てあっていました。後半は3クラブのジャグリングで、過度にマニャックな技には走らず、曲ピタで技が決まるのが見ていて気持ちよい。3クラブが充実していたので、最後の4、5クラブは冗長な気もしました。シリアスな演技の最後に笑わせてくれるオマケには好感。

即興[1・9・3](矢熊進之助/デビルスティック、江草啓太/ピアノ)

ピアノの生演奏とデビルスティックによる即興という、おそらく過去に例がないであろう演目。台本がなく、役者のアイデアをキャッチボールしていただくだけでストーリーを作っていく即興演劇(インプロ)のプレイヤーでもある矢熊さんが、やはり即興性が魅力であるジャズ音楽にデビルスティックを組み合わせたいと考えて実現した野心的な作品です。事前に何度か手合わせをして、デビルスティック、ピアノそれぞれのプレイヤーが好みとするフレーズを見せ合った上で、当日の舞台の上で互いの演技や音楽に、自分の音楽や演技を合わせていく、という作り方をしたのではないかと想像します。観客としては見ていてスリリングでもあり、生演奏ゆえの柔軟性も感じることもできて、興味深い演目でしたが、真の即興の妙味を味わえる域にはまだ達していないとも感じました。具体的には、同じフレーズ(連続技)が繰り返し出てきてしまう、タイミング合わせのために何もしない待ち時間が空いてしまう、といった点に改善の余地がありそうです。演じるほうにとってはとても難しく挑戦的な演目であることを理解したうえで、今後の発展を期待したいと思います。

[西川 正樹 <nishi-m@tkf.att.ne.jp>]



ブログ風アート見物記

【4月～6月分】

国本武春お花見ライブ (4月5日/横浜にぎわい座)

観客の入りは5～6割程度で少々寂しく盛り上がりもイマイチだったけれど、浪曲は楽しめました。「大浦兼武～出世物語～」は、裸一貫で上京した大浦がひょんな事から岩倉具視に見出されやがて大臣へと出世するという話で、突拍子もないストーリー展開ですが、そこは武春さんのスピーディで小気味よい語りや笑いと共につついのせられてしまいます。

綾戸智絵 Concert 2006 (4月13日/よこすか芸術劇場)

ピアノ演奏も音楽も専門家としての教育は受けていないと思うのですが(要は技術的には飛び抜けて上手いとは言えない)、それでも辛酸を舐め尽くした人だからこそ、テクニックを越えて人の琴線に触れられる何かを持っているのでしょう。良い意味で心を開けっぴろげにしたそのステージは無邪気でもあり、ちっちゃなおしやまな女の子が、そのまま舞台上がってはしゃいでいるかの如く。「朝起きて(自分に)おはよう、と言う前に思うんです。生きてるわ！今日も生きるように生きてるわ！」一日一日をギリギリのところまで精一杯に生きる、それが彼女のスタイルのようです。

トークライブ「美しき地球の記憶」(4月14日/BAR SHIZEN)

独自の感性と手法で地球の美しい音を録音し、「美しき地球の記憶」シリーズのCDを制作しているジョー奥田さんの新譜CD『YAKUSHIMA』発売を記念してのトークライブ。どうやって自然の音を録音するのか機材を含めた録音手法やエピソード話など、心地良い屋久島の自然の音をバックにお話してくれました。

美輪明宏版「愛の賛歌～エディット・ピアフ物語～」(4月20日/ルテアトル銀座)

ん～ん～もの凄いものを観てしまった。これでもかこれでもかというくらいに美輪明宏さんの波動を感じつつの3時間半。美の伝道師として年齢と性を超越して生き続けるその恐るべきパワーに畏怖の念すら感じます。彼(彼女?)を神格化して思わず拝んでしまいそう・・・美輪さまワールドを堪能！

野毛大道芸/ヨコハマ大道芸/みなとみらい21大道芸 (4月22日/横浜)

三つの組織による大道芸がエリアを分けて同時開催、と言うことはパンフレットも三種類ある訳で、誰がどこで何をやっているのか現地に行き行って把握するのは大変です。かと言って各々のサイトを事前に確認して行ってもその通りには行われていないし、見に行く者にとっては、はなはだ迷惑な事態となってしまいました。でも行けば行ったで個性的なパフォーマンスに出会えて楽しいけれどね

熊川哲也Kバレエカンパニー展 (4月28日/松屋銀座)

熊川哲也さんが1999年に設立したKバレエカンパニーが上演している作品の衣裳とビデオ上映を中心とした展示会。バレエという総合芸術を日本でも文化として育ち根付かせるために、旧態依然とした慣習を打破して新しいシステムを取り入れていこうとする、いわば文化の改革者としての彼のメッセージを感じました。

Mr.マリック超魔術団・MIRACLE DREAM Vol.2 (4月28日/銀座博品館劇場)

Mr.マリック、Lu Chen、RYOTA、高橋ヒロキ、内田貴光、ケン正木、Dr.ZUMA、カズカタヤマ...と出演者が多すぎて少々散漫となってしまった舞台でした。つまり印象に残ったマジックが思い当たらない。

講演「誰かとどこかで/永六輔」(4月29日/はまぎんホール)

永さんが作家との交友関係を横浜という土地に絡めて面白可笑しく話され、場内に笑い声は絶えませんでした。開場と同時にホールに入ったら開演30分前なのに既に永さんは舞台の上で「30分も一人で楽屋にいるのは退屈だし、皆さんだって待っているのは嫌ですよねぇ。」と演題とは別の内容でお喋りスタート。いやはやよく喋る喋る。その独特の語り口には酔ってしまいます。

ブラド美術館展 (5月3日/東京都美術館)

芸術家による芸術家のための美術館と言われるマドリードの「ブラド美術館」を数年前に訪れた時には、その中にいるだけでとても心が豊かになった、そんな感じがしたものです。あの優雅さはこのような企画展では味わう事はできませんが数々の名作の前ではしばしの間足を止める事も。

大道芸(ヘブンアーティスト 金子隆也)(5月3日/上野公園)

ディアボロの若手の名手。リングとヨーヨーを使ったトリックは初めて見ましたが斬新。でも地味でマニア受けのトリックですけれどね。

World Street Performance Festival (5月3日/六本木ヒルズ)

レ・クザンのメンバーの一人であるジュロが見せる高さ9mのポールの上で見せるバランス芸は、もちろんスリリングだけれどどこかノンビリとした優雅さを感じさせる。キューパサーカスは縄跳び、一輪車、ロシアンバーそしてシーソーアクロバットと多彩なサーカス芸を実に楽しげに披露。

熊川哲也 Kバレエカンパニー『ジゼル』(5月19日/東京文化会館)

初めてのバレエ鑑賞。2冊の本「バレエに連れてって！/守山実花」と「バレエの魔力/鈴木晶」を読んで予習したせいもあり、予想以上に素晴らしく楽しめました！バレエなんて、と心の隅で思っていた「食わず嫌い」の自分に反省。

水芸・江戸の手妻～藤山晃太郎 出世披露～(5月24日/三越劇場)

現代における「和の世界」を追求・表現する藤山一門の手妻と舞踊を堪能。『(手妻が)和の世界への入り口となってくれればと思います。』という新太郎さんの言葉には和の芸に対する愛情を感じます。ギンヤマセイロ、蒸籠、紙片の曲、柱抜け、蝶のたはむれ、金輪の曲、水芸...邦楽の生演奏をバックに、これら手妻はどれをとっても不思議さだけではなく雅に溢れています。第二部では舞踊(長唄)も披露され、日本の伝統芸能手妻の後継者としての晃太郎さんに期待がかかります。

特選落語名人会(6月10日/神奈川県立県民ホール)

暗転の中、一筋のスポットライトに浮かび上がる小朝師匠。「心中富士」は車中で心中を試みる二人の会話、「晴れの日」は明日結婚式を挙げる一人娘と父親との会話。二題とも新作でそれほどの爆笑ネタではなかったのが残念。でも圓歌師匠の「中沢家の人々」は場内大爆笑！私は何回も聞いているしCDまで買って聞いているからちょい退屈。翁家勝丸さんは芸能一家に育ったこともあり、若いけれど寄席芸人としてなかなかいい味を出していますが、技術的にはまだまだといった感じ。

リアルジャグリング(6月10日/こまばエミナース)

これだけ国内トップクラスのジャグラーが介しての本格的なショーは初めてでしょう。ワクワクして会場の一時間前に到着したものの既に長蛇の列！個々の演技の羅列的な公演なのかなあと思いきや、構成・演出が良くできていて全体としてまとまり感があり、あつという間の久々に興奮した1時間半でした。演者の皆さんはとにかくカッコイイ！その個性が上手く引き出されていたのではないのでしょうか。

KAMIYAMA『玩具協奏曲』(6月13日/シアターX)

見終わった後でじわ～と効いてくる不思議な劇場公演。パントマイミストやクラウンの公演でもなく、あんなの観たことないよなあ、でも小難しくもなく素直に楽しめる、そんなオリジナリティが溢れる内容の公演でした。

堀の外のジャグリング(6月24日/門前仲町天井ホール)

気になった事は、道具(演目)がだぶっていた、大道芸スタイルの演技があった、ドロップが多かった。気に入った事は目黒さんの新しいプログラムとしんのすけさんの即興(インプロビゼーション)による演技。即興による演技は大変難しいという事が分かったのですがチャレンジのしがいがあり、さらなるデビルスティックとの一体感を求めて頑張ってくださいね。しんのすけさん(^_^)/

中村あゆみミニライブ(6月25日/横浜港南台バース)

「翼の折れたエンジェル」の大ヒットはもう21年前なんですねえ。一旦音楽活動を休止してのしばらくぶりの再開。彼女も今年で40才ですがお子さんもできいろいろな経験を経ての大人の歌声。バラードにはグッと胸を打たれました。昔はそうは思わなかったけれど、いい声してるじゃん！『歌うために生まれてきた。歌でみんなを元気づけたい、頑張ってもらえれば...』人生の年輪を重ねた彼女からのメッセージには説得力があり、会場にいる昔からのファン(今ではおじさんやおばさんですが)のボルテージは上がってイベント会場のミニライブにしては異様に盛り上がっていました。いやーっ、トークも熱くって面白かったし、たんとパワーを頂きましたよ。ありがとう。

花形演芸会(6月28日/国立演芸場)

林家たい平さんの「たがや」には爆笑。オチは侍の首が飛ばずに、橋上での職人の胸上げといった変わり種。翁家和助さんは海外製デビルスティックを大道芸風に演じ、くわえバチに鞆をのせて縄跳びや障害物を乗り越えるなど寄席ではあまり見た事のない演出で曲芸を披露。太神楽という芸能の観点からは演出法に少し疑問を感じてしまうなあ。出刃皿もイマイチの出来。

国際サーカス村協会・例会(6月30日/千駄ヶ谷区民会館)

今回のゲストはジャーナリストのケントさん(デンマーク人)。職業柄世界各地を股にかけて活動されていますが、サーカスや見世物にも興味を持ちその分野でも才能をいかに発揮されています。ペルーのサーカスを中心に話しが始まり、インド、自国デンマークを含む欧州、そして米国などのサーカス事情についてお話しいただきました。しかしペルーのサーカスはレベルも高く侮れないゾ。

[安部 保範]



イベント紹介

【 ジャパン・ジャグリング・フェスティバル JJF2006 】

開催日： 2006年10月7日(土) - 9日(月・祝)

開催場所： 東京・代々木 国立オリンピック記念青少年総合センター

主催： NPO 日本ジャグリング協会

URL： <http://www.juggling.jp/jjf/jjf2006/jp/index.html>

大体育館、劇場、宿泊施設が揃った、とても恵まれた会場で開かれます。

多数の充実したワークショップや体育館での自由練習で技術を学んだり、チャンピオンシップ、フリーパフォーマンスで発表をしたり、海外・国内のゲストによるゲスト・ステージや今回が初の有志によるナイト・ショーを楽しんだり、ジャグリング漬けの3日間を過ごせます。

施設の都合上、8/31 で参加申し込みが締め切られ、当日参加は不可なので注意が必要です。

海外ゲストはドイツから、トス・ジャグリングのトーマス・ディーツ Thomas Dietz とピーター・ガーバー Peter Garber、デビルスティックのマークス・ファートナー Markus Furtner の3名が初来日します。

国内ゲストは江戸太神楽の丸一仙翁師匠(鏡味小仙より改名)とその社中の皆さんです。

ゲスト・ステージは、JJF参加者以外も観覧可能です(2,000円)。

【 Fanta Stick 2006 】

開催日： 2006年9月10日(日)、11日(月)

開催場所： 東京都江東区夢の島 BumB 東京スポーツ文化館 サブアリーナ

URL : <http://www12.plala.or.jp/mekeke/fantastick/>

デビルスティック、フラワースティック、バトン、スタッフなど棒状の道具に絞ったフェスティバル。

ワークショップ、コンテスト、ゲームなどのイベントが企画されています。なお今年は宿泊も受け付けています。

編集後記

物質的に豊かだが心貧しい国、子供から高齢者まで一様に心が風化していると日本を評し、豊かな情感・感情を取り戻すべきと説く五木寛之さん。必要なことは能力トレーニングよりも情感トレーニングで“絵は魂の食べもの”という言葉引用し、『音楽も文芸も芝居も魂の食べもの。私たちの心にも、栄養やエネルギーとしての食べものが必要だと思う。情を養う“養情”が大切でしょう。』こんな世の中だからこそ情操を育て保っていくにはそれなりに意識して実践しなければならないような気がします。子供の情操を育てる必要性は議論されるけれど、若者だって、大人になってからだって大切なんです。皆さん、情感トレーニングしてますか？

ジャグパルは私という一個人が野次馬根性丸出しで、単なる趣味として発行して、特定の企業、団体あるいはパフォーマー個人に関係しているものではありません。

編集発行人：安部保範(神奈川県横浜市栄区 在住)

Webサイト JugPal<<http://www.chansuke.net/jugpal/>>

見世物広場<<http://www.chansuke.net>>

E-mail:misc@chansuke.net

これ を書いたことがばれると愚息に叱られますが、表現の自由じゃ!(なんのこっちゃ)

今春とある大学に入学した彼は、何を思ったか小中高時代にはあまり縁のなかったジャグリングを始めて、しかも大学のジャグリングサークルに入部しちゃった。ジャグリングとは自分なりのやり方で未長く付き合っていて楽しんでちょ!(^^)